

# 第1章 幼保小連携がめざすもの

— 発達や学びの連続性を踏まえた円滑な接続 —

## 1. 中央教育審議会答申に示されている「幼保小連携」の改善・充実について

「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」（平成17年1月28日）

答申では幼児教育の大切さが改めて確認され、教育の優先課題として捉えている。その中で、今後の幼児教育の方向性として、「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえて幼児教育を充実していく必要性」があると提唱されている。

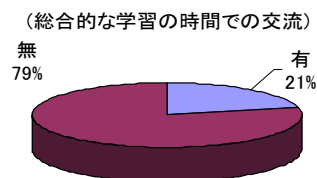
答申の中では、幼児教育について、5歳児の幼児が挑戦的な課題など一つの目標を作り出し、協力して解決していく活動を「協同的な学び」として位置づけて取り組むことや、興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びなど、より小学校へのつながりを踏まえた教育内容や方法を充実することが求められている。

遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行をめざし、幼稚園等施設と小学校との連携を強化しながら双方の質の向上を図り、幼児教育の成果を小学校教育に効果的に取り入れる方策を工夫しなければならない。

## 2. 幼保小連携の現状と課題

### (1) 異年齢交流について

幼保小連携は以前からその必要性が求められてきた。従来、体験入学は入学前の「小学校見学」が多かったが、最近、実際に1年生の教室で模擬授業を受けるなどの工夫がなされてきている。子どもたちの交流も年に一回程度のイベント的なものから、全体の半分程度（生活科52%、総合21%等）ではあるが、教育課程上計画的に位置づけられたものが増えてきている。

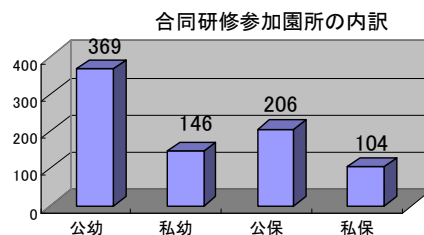


しかし、交流の後に反省会を実施しているところは半分程度（体験入学62%、生活科70%、特別活動53%等）にとどまっている。

### (2) 教員連携について

子どもたちの成長や学びの連続性を保障する為には、幼保小の教員の相互理解が重要であるが、現状では合同研修の実施は約40%、相互参観は約20%、体験となると数%になる。

また、右図は保幼保小合同研修の実施状況だが、公立幼稚園以外の施設との合同研修の機会が大変少ない。就園人口の8割程度が公立以外の施設に通っている現状を勘案すると、これらの施設との交流の促進が今後の大きな課題である。



### (3) 保護者へのアプローチ

入学説明会はほとんど全ての学校で実施され、子育て講演会等もあわせて実施する学校が約3割に増えた。保護者の入学前の不安や要望等を把握するために、入学前にアンケート調査を実施している学校が5%あるが、今後このような取り組みが府内に広がることが望ましい。

### 3. 幼保小連携がめざすもの

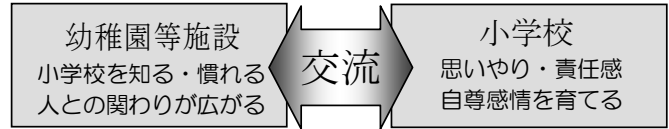
#### (1) 幼保小連携のねらい

- ① 子どもたちが、小学校入学に際して不適応を起こさず、小学校での学習や生活を円滑に行えるよう、就学前教育と小学校教育の滑らかで確実な接続（幼保小間の段差の解消）を図る。
- ② 教員同士が教育内容や指導法の違いを超えて、互いの教育の理解を図り、幼保小の一貫した教育をめざす。

#### (2) 幼保小連携の在り方

##### ① まず、異年齢交流等から

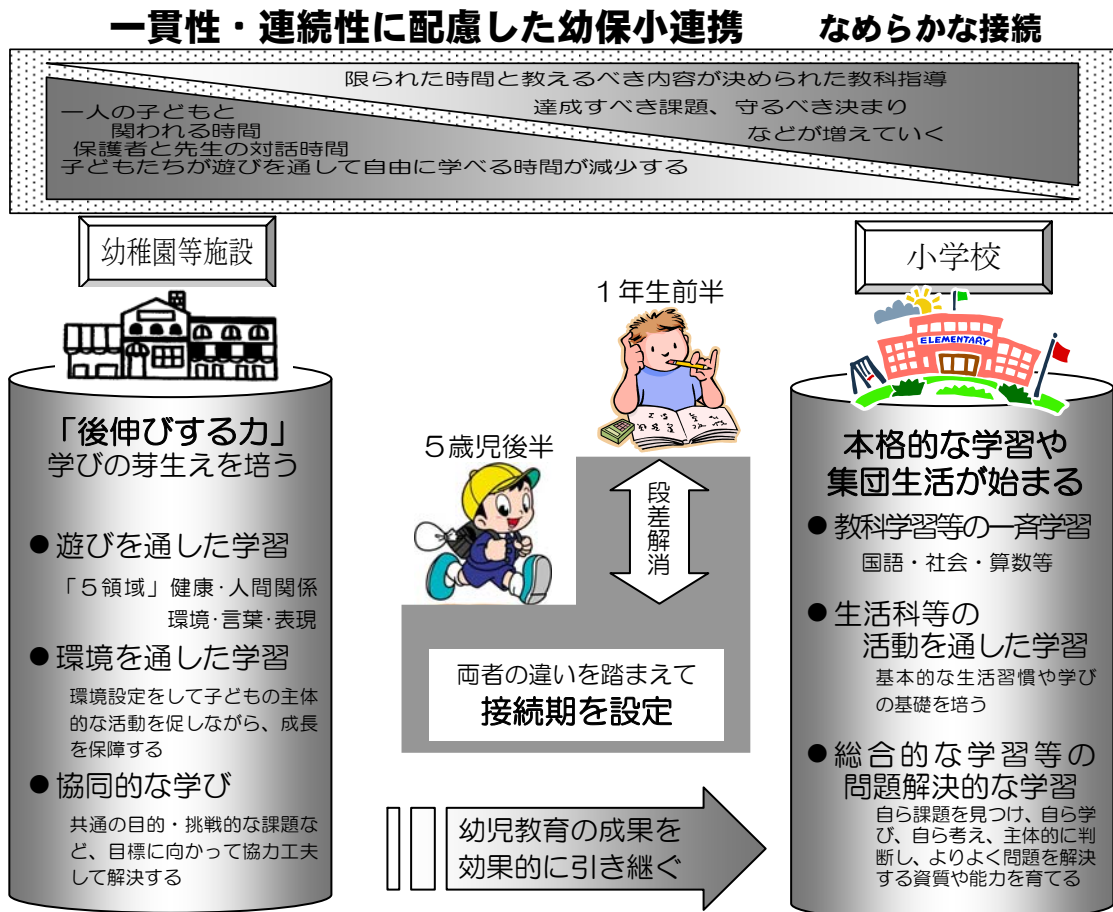
小学校入学に対する不安を軽減する



ために一番効果があるのは、「小学校生活を体験することができる」機会を作ることである。具体的な形で成果が現れやすいのは異年齢交流である。幼保小連携の効果を上げるには、従来のイベント的なものより生活科や総合的な学習の時間などに位置づけて「ねらい」と指導計画を明確にした取り組みが必要である。

##### ② 異年齢交流から教員連携へ

幼保小連携のねらいを「なめらかな接続」とするならば、異年齢交流はまだその入口にすぎない。異年齢交流で不安が軽減されたとしても、教員の指導法や対応の仕方に段差を感じるならば、その効果は半減される。子どもの側から考えると、小学校に入学すると幼稚園に比べて楽しく遊んだり、先生に気持ちをじっくり聞いてもらったりする機会が減り、先生からの直接指示や達成すべき課題、守るべき決まり等が急に増える傾向がある。異年齢交流を入口に、総合的ななめらかな接続を出口として、幼保小連携を推進することが大切である。



③ 接続期を設定してなめらかな接続をめざして

前頁図の中央部分（接続期：5歳後半～1年生前半）において、5歳後半で少し階段を上げ1年生前半で少し階段を下げるような工夫をすると段差は緩やかになる。

5歳後半の階段を上げるというのは、小学校教育の前倒しではなく、「協同的な学び」を取り入れたり、子どもの興味関心が学びにつながるような指導法の工夫をしたりすることを意味する。1年生の階段を下げるというのは、就学前の子どもの生活の様子を理解し、幼稚園での育ちを確実に引き継ぐような工夫をするという意味である。決して、1年生の学習活動の水準を下げるということではない。

このような考え方は、暗黙のうちに取り組まれていたかもしれないが、より意識して分析的に取り組むことが大切である。（「協同的な学び」についてはP29参照）

**■ 幼児教育の成果を効果的に引き継ぐために ■**

- それぞれの時期の発達課題を明確にして、教育・保育を分担する。
- 幼保小の教員が互いの子ども観・指導法などを理解しあう。
- 子どもの育ちや学びをつなぐための指導の一貫性・連続性を追及する。
- 中学校区単位などで、子どもたちの育ちの現状を確認し、めざす子ども像を共有し合えるような会議を定期的に設定する。

(3) 幼保小連携の課題と具体的な方法

	子どもの交流	教員の交流・連携	保護者へのアプローチ
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 入学前に小学校を体験して未知に対する不安を軽減する。</li> <li>● 「ねらい」を明確にした指導計画を作成する。</li> <li>● 互惠性があるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校文化の違い（特有の価値観、指導理念、暗黙知等）を理解する。</li> <li>● カリキュラムの独自性と連続性を踏まえた一貫した指導が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● それぞれの教育のねらい等に対する説明責任を果たす。</li> <li>● 子育てが孤立する傾向にあって、生活習慣を身に着けていない子どもが増えている。</li> </ul>
具体的な方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 年間行事、教育・保育計画に位置づける。</li> <li>● 全体対全体でなく、少人数グループを固定して交流を継続する。</li> <li>● 子どもが満足感を得られるようにできるだけ子どもの主体性に任せる。</li> <li>● 5歳児と5年というような交流パターンを決める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 連携担当者を校務分掌に位置づける。</li> <li>● 中学校区程度でめざす子ども像を共有し、課題を話し合えるような定例会議を持つ。</li> <li>● 具体的な共通課題についてテーマを設定して合同研修を実施する。</li> <li>● 相互に保育公開、授業参観をしたり、1日体験等の機会を設定したりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● わかりやすいプレゼンテーションを駆使した入学説明会を実施する。</li> <li>● 入学前のアンケートを実施し、保護者の声に耳を傾け、そこから見つかった課題に対して具体的な対応を検討する。</li> <li>● 学校が親しみやすく感じるような雰囲気作りを工夫する。</li> </ul>